



# 臨床糖尿病支援ネットワーク MANO a MANO



“mano a mano”とはスペイン語で“手から手へ”という意味です

これまでの糖尿病診療、これからの糖尿病診療

〔当法人理事〕

東京都立多摩総合医療センター

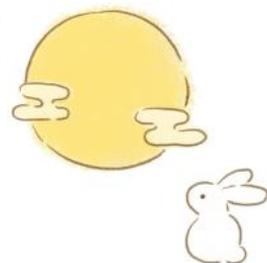
辻野 元祥 〔医師〕

少々早めのご報告になりますが、私事で恐縮ながら、2026年3月をもちまして病院勤務を卒業することになりました。1996年7月に、前身の都立府中病院に着任して以来、前半は府中病院、後半は多摩総合医療センターと、ちょうど半々の年月を過ごしてまいりました。科の責任者とはいえ、決してひとりでは何もできず、多くの優秀な先生方、メディカルスタッフの皆さんに支えられ、ようやくここまでやってこられたというのが実感です。また長年にわたり、循環型医療連携にご理解、ご協力いただいた地域の先生方、医薬連携にご尽力いただいた薬局の先生方にも心より御礼申し上げます。

来年5月からは、これまでの経験を生かし、新たに糖尿病・内分泌代謝疾患を中心としたクリニックでの診療を始める予定です。改めて申し上げるまでもありませんが、基幹病院で担当してきた糖尿病診療と診療所における糖尿病診療は方向性や役割が異なります。これまでは、治療困難例や社会的困難例をご紹介いただき、多職種で問題解決に取り組む機会を多くいただきました。一方で、外来の混雑のため十分に患者さんのお話を伺えなかったり、じっくりと向き合った対応ができなかったことへの、葛藤も多々ありました。加えて、公立病院ということもあり、予算の制約や厳格な保険診療の枠内の治療に限られるという面もありました。

これからクリニックで目指したいと考えているテーマは、“anti-aging”と“well being”です。前者は、高価なサプリメントを用いて若返りを目指す、という話ではありません。患者さんとともに多因子介入を極めることは、健康寿命の延伸、すなわちanti-agingに直結すると確信しているため、クリニックでも高いレベルで実現していきたいと考えています。ただ、anti-agingが叶えられればヒトは幸せか、well beingが得られるかということそれは別問題です。むしろ、相反する要素さえあります。昨今注目されているwell beingは容易なことではありませんが、少なくともメディカルスタッフや私、医師自身のwell beingがなければ、究極の目標である患者さんのwell beingに寄与することは難しいと考えています。患者さんがあるがままを肯定的に受け止め、一度しかない人生をかけがえのない大切なものと感じてもらえるような場を、どのように築いていけるのか…。明解な答えはありませんが、開院前も、そしておそらく開院後も悩みながら、前に進んでいきたいと考えています。もちろん、来年3月までは、現職でベストを尽くします。

これからも温かいご支援の程よろしくご厚意申し上げます。



読んで  
単位を  
獲得しよう

西東京糖尿病療養指導士(LCDE)は、更新のために5年間に於いて50単位を取得する必要があります。本法人会員は、会報「MANO a MANO」の本問題及び解答を読解された事を自己研修と見做し、**1年につき2単位**(5年間で10単位)を獲得できます。毎月、自分の知識を見直し、日々の療養指導にお役立てください。

(「問題」は、過去のLCDE認定試験に出題されたものより選出、一部改変しております。)

**問題** 運動のエネルギー代謝について、誤っているのはどれか、2つ選べ。

(答えは3ページにあります)

1. 安静空腹時の筋のエネルギー源はほとんど遊離脂肪酸である
2. 有酸素運動では糖質のみエネルギー源として利用される
3. 無酸素性作業閾値(AT)は運動耐容能の指標にはならない
4. 運動による筋収縮は、インスリン非依存性および依存性に糖の取り込みを促進させる
5. 動作筋では、安静時と比較し、十数倍のエネルギーが消費される



## 報告

## 第12回薬剤師糖尿病指導研究会

日時: 令和7年4月26日(土)  
三鷹産業プラザ

令和7年4月26日(土)に対面形式にて、『第12回薬剤師糖尿病指導研究会』が開催されました。

昨今の糖尿病診療にて登場する機会が増えている「週1回製剤」をテーマとし、第I部では、杏林大学医学部附属病院 薬剤部 小林 庸子先生より薬剤師の視点から週1回製剤の用法・用量の違いや低血糖・シックデイ時の対処方法について事例を交えて詳しくご教示いただきました。

第II部では、朝日生命成人病研究所附属病院 診療部長・糖尿病内科部長 大西 由希子先生より「最新の糖尿病治療～Weekly Insulin製剤～」という演題にてご講演いただきました。インスリン製剤を新規導入する際の基準や事前にお伝えする注意点など適正使用のポイントを中心にご教示いただきました。

当日は久々の対面形式にも関わらず17名の方々にご参加いただき、質疑応答の時間も熱心な意見交換がされ、大変有意義な会となりました。



## 報告

## 第11回西東京糖尿病と感染症フォーラム

日時: 令和7年6月18日(水)  
オンライン

倉井先生

令和7年6月18日(水)Web配信にて『第11回西東京糖尿病と感染症フォーラム』が当番世話人の東京医科大学八王子医療センター 糖尿病・内分泌・代謝内科 科長/講師 松下 隆哉先生および国立がん研究センター中央病院 感染症部 部長 小林 治先生のご挨拶により開催されました。会に先立ち、本会の代表世話人である医療法人社団糖和会 近藤 医院/ヒガコ駅前 結クリニック院長 近藤 琢磨先生よりご挨拶をいただきました。

講演Iの糖尿病パートでは、東京医科大学八王子医療センター 糖尿病・内分泌・代謝内科長/講師 松下 隆哉先生のご司会で、愛媛大学総合健康センター 教授 古川 慎哉先生より『食習慣・睡眠環境から見直す糖尿病への取り組み』と題しご講演をいただきました。糖尿病治療の中で食生活に着目したご講演で、食事を摂るタイミングやスピードなどが血糖値のみならず睡眠にも影響を与えるといった内容でした。糖尿病疾患および睡眠で悩む患者さんは年々増加しており、明日からの患者さんとの向き合い方を考えるきっかけになったとのことでした。

講演IIの感染症パートでは、国立がん研究センター中央病院 感染症部 部長 小林 治先生のご司会で、杏林大学医学部 臨床感染症学教室 臨床教授 倉井 大輔先生より『呼吸器感染症のワクチン(RSウイルスを中心に)』と題しご講演をいただきました。RSウイルスワクチンについては発売して間もない製品であり、ワクチンを打つべき患者さんや自治体の助成制度の活用方法についてご講演いただきました。Webでの開催となりましたが、223名の方々に視聴いただき大変有意義な会となりました。本会に携わられた先生方に感謝申し上げます。





## 第68回日本糖尿病学会年次学術集会

令和7年5月29日(土)～31日(日)

ホテルグランヴィア岡山 他

八王子糖尿病内科クリニック

前橋 日南子 [看護師]

第68回日本日本糖尿病学会年次学術集会が5月29日から5月31日まで開催されました。今回は15年ぶりに岡山で開催され、会場や駅周辺には桃太郎グッズやきび団子がたくさんありました。当院からは医師・看護師・臨床検査技師と共に参加し、それぞれ桃太郎・猿・犬・雉・鬼のポーズをしながら記念写真を撮り、とても良い思い出になりました！

今回の学会のテーマは『臨床と研究の架け橋』でした。昨今、新規糖尿病治療薬が多く販売されていますが、その背景にはたくさんの研究の成果があって販売に至っていること、その一方で実際に臨床の場で理解力低下している患者さんや高血糖の患者さんに使用し、その効果や副作用を判断していかなければならないという発表を多く耳にし、研究と臨床の双方の大切さを身感じました。

私が今回特に印象に残ったのは、SGLT2阻害剤についてです。血糖改善だけでなく、腎保護・心保護効果についても明らかになっていますが、今回の学会では、糖尿病専門医だけでなく、腎臓内科医・循環器内科医も有用性について発表されており、その注目度を感じました。発表の中では、高齢者への投与への安全性について

の議論が多く聞かれ、痩せている高齢者への投与は避けた方が良いという意見もあれば、SGLT2阻害剤では筋肉量の変化は見られないため、投与可能であるという意見も聞かれ、非常に興味深い議論でした。その中でも、どの先生も共通して話していたことは、「患者の状態・状況に合わせて投与を検討する」ということでした。既往歴やPS等、患者さんの個別性に合わせて検討していくことが重要であり、実際に日々患者さんに診察や面談をしている私たちにしかできないことであり、研究では見えない臨床の醍醐味のようなものを感じました。また、認知症や高齢化、サルコペニア・フレイルなどの現代の問題に対する発表も多くあり、サルコペニアを予防するための運動療法では、病院近くのジムと提携する、YouTubeを活用するなど様々な取り組みがされており、運動療法の大切さを改めて感じました。一方でミニメド780GやGIP/GLP-1受容体作動薬、週1回の持効型インスリンなど、新しい治療や薬に関する発表もあり、これまで学んできたことの再確認、新しい知識の習得と非常に学びの多い学会でした。

日々進歩し続ける糖尿病治療に追いつくため、自分自身も日々勉強をし続けなければ！と感じた3日間でした。学会で学んだことを明日からの療養指導に生かし、少しでも患者さんの療養のサポートができるよう頑張っていきたいです。



読んで  
単位を  
獲得しよう

答え 2, 3 下記の解説をよく読みましょう。

(問題は1ページにあります。)

解説 1. ○

2. × エネルギー産生に酸素を利用する有酸素運動では、脂質と糖質がエネルギー源として利用される。酸素を利用しない無酸素運動では糖質のみが利用される。
3. × 無酸素性作業閾値(anaerobic threshold:AT)は、運動強度が次第に強くなるにつれて有酸素運動から無酸素運動に移行する境界点のことであり、運動耐容能や全身持久力の指標として活用できる。長期間にわたる運動の継続により改善が期待できる。
4. ○
5. ○

## 研究会等のセミナー・イベント情報

 主催事業
  共催・後援事業
  その他

 第26回 西東京糖尿病療養指導士養成講座

 申込必要

期 間：2025年9月1日（月）第1講開講 以降12月5日（金）まで計14回実施

時 間：19:00～20:30

参加方法：Zoomにて開催いたします

受講料：当法人会員 12,000円 / 一般 20,000円（全14回講義分として）

申 込：当法人ホームページ <https://www.cad-net.jp/> よりお申し込みください（9/28締切）

※詳細は、「新着情報」の「第26回西東京糖尿病療養指導士養成講座のご案内」をご確認ください

 オンライン

## 【聴講制度のご案内】

聴講制度により、LCDE認定者も受講可能です。養成講座を受講されると 40単位を上限とし、1講義出席につき4単位取得 できます。

マイページ内の聴講制度に関する掲示より、Web決済にて受講料をお支払いください。（9/28締切）

※受講料は、全14講義分一括納入のみとなります。

☆西東京糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位：1講義につき4単位

 第24回 糖尿病予防講演会

 申込不要

テーマ：『防災と糖尿病』

開催日：2025年9月13日（土）14:00～17:25

会 場：cocobunji プラザ・リオンホール（JR中央線「国分寺駅」下車北口すぐ）

問合せ：臨床糖尿病支援ネットワーク事務局 TEL：042-322-7468

☆西東京糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位：3単位

☆日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位<第2群>：1単位申請中

 参加費  
無料

 一般社団法人 臨床糖尿病支援ネットワーク 第79回例会

 申込必要

テーマ：『糖尿病と栄養～今こそ食事療法を見直そう～』

開催日：2025年9月26日（金）19:20～21:00

会 場：Zoomにて開催いたします

参加費：当法人会員 無料 / 一般 2,000円

申 込：当法人ホームページの「セミナー・イベント情報」よりお申し込みください（9/26締切）

問合せ：臨床糖尿病支援ネットワーク事務局 TEL：042-322-7468

☆西東京糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位：4単位

 参加費  
無料

 オンライン

 第16回 西東京糖尿病運動指導スキルアップセミナー

 申込必要

テーマ：『糖尿病と肥満～やりたい心が動く、働き世代、リタイヤ世代の運動メソッド～』

開催日：2025年10月19日（日）8:30～17:00

会 場：北里大学薬学部 白金キャンパス 3202大講義室（3号館）・体育館（アリーナ棟）

（JR山手線「恵比寿駅」下車 徒歩20分 または 都営三田線「白金高輪駅」下車 徒歩13分）

参加費：当法人会員 6,000円 / 一般 8,000円（いずれも昼食代込み）

申 込：当法人ホームページの「セミナー・イベント情報」よりお申し込みください（9/30締切）

問合せ：臨床糖尿病支援ネットワーク事務局 TEL：042-322-7468

☆西東京糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位：10単位

☆日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位<第2群>：2単位申請中

☆健康運動療法士及び健康運動実践指導者の登録更新に必要な必修単位<講義/実習>：計7単位

## 発行元

一般社団法人 臨床糖尿病支援ネットワーク事務局  
〒185-0012  
国分寺市本町2-23-5 ラフィネ込山No.3-802  
TEL:042(322)7468 FAX:042(322)7478  
<https://www.cad-net.jp/> Email:info@cad-net.jp

## 編集後記



先日ある患者さんから、ずっと忙しくて自分の事は疎かになり歯もボロボロなの、といったお話を伺いました。歯の健康は血糖だけでなく美味しく食事を続けるためにも大切ですが、つい後回しになりがちですよ。ちょうど先月、歯科医の半年毎の定期検診があり、あまりの暑さに挫けそうになりながら、退院したら歯医者さん行きます！とおっしゃっていた、そんな患者さんとの会話を思い出していました。（広報委員 永田 美和）